

片道切符

『新壘』
60-1号

未来とは青ずむまでの羞しさとみぢんに散らす朝の
パ
セリ

他界なほ未来なる国ぞ掌中に行きつくまでの片道切
符

明日より昨日に恃むこころ意気跡に冷えくる夜の愁

しきりー

かぐはしき寡婦なる憂ひのひろごりに枯紫陽花の風に
鳴る夜

癸熱を阻む氷を砕きゐる三界に家なきをみなのひとつ
り

高層の不安

『新壑』
60-2号

こころざし捨てむ昂りに踏み潰す夏の誇りと麦藁帽
子

灯の下に刃を磨ぐひとり昂りてみづからに疵つく明日
を懼るる

限りなく高く美しき不安にビルは建ちあまた窓に灯
点る

累ねゆく不穩にかがやくビルの街あたたかき彩に雪降
りいづる

高層のあはひに矮くわれは立つ織きヒールに不安支へて

黄の悲哀

『新壑』60-3号

胸ふかく死者を鎮めむ冬ながらのちのさきはひなだらかに来よ

雪に濡れ黄の悲哀のこぼたるるややに俯く水仙を愛づ

喰べて寝るただそれだけの残生に黄薔薇は黄薔薇でなければならぬ

易々と得たりしものは罅割れむたなそこにあるひとつ湯呑みよ

家族とふほの温きものは遠く在り子持ちシンヤモを炎に焙る

寒の薔薇

『新壑』
60-4号

グラスに挿す寒の黄薔薇の棘々し永久の訣れの言葉と
り持つ

グラスごと凍てし黄薔薇いち輪に陽が射せりたまらな
き弱さに

風邪熱は微々たるも謔言のうはすべり生きの証のなべ
て消さるる

さきはひは孤りにて足ると独白のみづから渡る冬の街
川

自在にて孤独を孕む冬風の届かぬ位置に白き雲ある

連翹の黄

『新壘』60-6号

うち勝たむ念ひはげしきわが前に突放の貨車のいつき
んを見る

杳き日の記憶の香りは鉛筆を削る単純に甦るかな

人におくれ己れにおくれて連翹を道草の身に塗しゆ
くなり

逝く際に従へゆくは黄の色と連翹の明るさに爪切る

風まじる黄色明るき花の下恍惚の犬のやをら立ち上
がる

草笛 『新壑』 60-7号

朝の陽は徐々にうつろひ食卓のバターナイフの先まで光
る

陽の温み帽子に溜めて駈けゆかむ草笛を吹く汝の距
離まで

夕壁に耳を打ちつけ聞き溜むる何んと云ふ一日のざ
わめき

恩寵は夕陽とともに傾けり明日の意志は明日よりた
づさふ

地平のはるか彼方に熟れ沈む幻の果实の重さ量れず

山莊雜感

『新壑』
60-9号

山莊に人の氣ほどの灯を点す今よりの未来はかなけれ
ども

山莊に何もなき身の貧しさに太陽ひとつ鏡にとりてふ
たつ

かそかなるものの音に聴き耳たつる風も動かぬ山間の
徑

われの瞳にいつも羞しく翹たたむ蝶も混じへて夏の山
莊

はろばろ来てはろばろ帰る後背を見てゐる岡の上の山
莊に

夏の火傷

『新壑』
60-10号

幾度の火傷の双掌かくりやべにひと生嘆きの炎を燃や
す

瞬時さへ明日を恃めず夏花火華麗に逢はば華麗に訣
れむ

淋しくて月を抱けり豊さに在らば誰の妻ともならず
るる

陽に光る穂すすきの中分けてゆくひとの一人は既に
忘れて

倅を頷つことなきひとつの訣れ詩ともならず風とも吹
かす

向日葵

『新壑』
60-11号

夏ながら冷たき訣れいはしむる決意の底に水の流るる

昼顔の野の淡紅を崩しゆく風ありわれの躓くところ

晩夏より初秋につなぐ向日葵は昂然と立ちいのちを
稼ぐ

廢園にしみじみ皓き 草の十字を摘まなひとつ訃報
に

しつかりと思ひ告げなむ秋雨のそぼ降る位置に動かぬ
決意

鳳仙花

『新壑』
60-12号

無謀なる計りごとせり潜らねばならぬ危ふき素甕に
満たし

聴くのみの言葉にからうじて身を支ふ蔦に蔦絡みあふ
もえにし

みづからに令はせる令はせ鏡にて中なるわれのひとつ命
は

薔薇園の薔薇の紅踏むに似て覆したり戻しやうなき
愛

高層の危惧地下への不安おびただし都会の憂鬱を曳
きずり歩む